

社会調査が現在の社会を理解し、よりよい社会にしていくために重要であることは誰もが認めることであろう。社会調査には量的調査と質的調査があり、究極には双方の研究を合わせた理解の蓄積が求められるが、方法論としてはかなり異なるとされている。量的な調査はある意味では数学的理論に従った方法が確立されているが、質的調査の方法については方法論を画一的に述べることは困難であろう。しかし、一見理論ののっぴき方法が確立されているとされる量的調査といっても、実際に理論どおりに適用できることはまれである。量的な社会調査とはいえ大切なところで理論を逸脱していることも多い。量的調査はすべて科学的であるとしてしまうことが、すでに科学的とはいえないかもしれない。質的調査であろうと量的調査であろうと、いかにデータを収集すべきか熟考し、真摯にデータに向き合い、その情報を蓄積しようと努めることこそが科学的というべきであろう。

1990年代半ばに中国上海浦東地区の開発が進む中で調査を行ったことがある（鮑戸弘理事長が研究代表者）。綿密な事前の打ち合わせののち、実施は現地研究者に任せたとこ、回収率100%という結果が報告された。明らかに打ち合わせとは違った抽出によるのであるが、その調査の意味がないかといえばそうではないだろう。実際にどんな調査が行われたかを把握できれば意味を見出すことができる。ちなみに報告会ではそうした調査状況とともに結果が報告されたが、2つの典型的な感想を聞いた。一方は「多少対象がはっきりしない調査結果からうまいところを引き出している」であり、他方は「調査をどう行った

社会調査協会副理事長 林 文

かなどの報告は意味がない、もっと調査結果を聞きたかった」というものであった。調査に対する考え方の違いもあろうが、後者の感想は科学的とは思えない。社会調査を用いた研究では、どのように行われた調査で得られた結果であるかに注目することが重要であるように思う。このことは、質的調査の事例研究であっても、量的調査であっても同様である。

近年、インターネットを利用した調査が安価な方法として横行している。インターネット調査は従来の標本調査の考えからはまったく逸脱しているのが現状であるが、何らかの情報が得られることは多い。たんにインターネット調査といっても、調査会社によって、登録者パネルの性質や、回答呼びかけの方法、調査票の提示の仕方などにさまざまな違いがある。そうしたさまざまな状況を把握してその状況とともに調査結果を述べるならば、科学的情報として蓄積される価値がある。調査結果が簡単に得られるというだけの理由でインターネット調査を認めるべきではないが、また逆に、インターネット調査というだけでまったく認めないのも調査のプロとはいえない。

面接調査にしても郵送調査にしても、回収率の低下という問題があり、何が正しいか単純にはいえない。社会調査は研究目的に合った調査内容の調査結果から見出される知見や仮説の検証が重視されるが、調査方法、その中で調査対象者をいかに得たか、回答者の性質はどうかという情報とともにあることの大切さを強調したい。それは社会調査を使った論文を読む側としても、必要なことである。